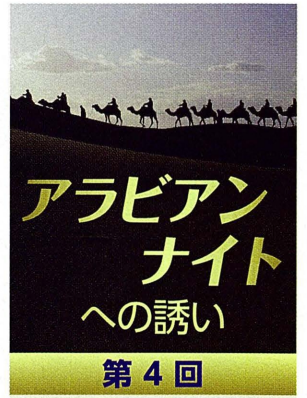


みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中世のカイロ：「カイロを見ずば、世界を見ず」
(アラビアンナイトへの誘い, 4)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5571



夢と不思議が錯綜するアラビアンナイトの世界を旅してみよう。第四回は「中世のカイロ―カイロを見ずば、世界を見ず。バグダード衰退後、イスラーム世界の文化的中心地はカイロへと移りました。」

中世のカイロ ―「カイロを見ずば、世界を見ず」

文
西尾 哲夫
text by
Nishio Tetsuo

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、同助教授を経て現職。現在、人間文化研究機構・国立民族学博物館副館長／教授、総合研究大学院大学教授

……「カイロを見ずば、世界を見ず……
といつてな。あそこの土は黄金、そのナイルは驚異、女たちは天女のように、建物はみな宮殿のごとくさ。あそこの空気は温和で、乳香のかおりでさえあれほどにかぐわしくはないのだ……」（『アラビアン・ナイト（東洋文庫）』《ユダヤ人の医者》より）

ここで紹介した《ユダヤ人の医者の話》は、アラビアンナイト最初期の写本（ガラン写本）に収録されている《せむし男の物語》に入っています。《せむし男の物語》は、カシユガル王のお抱え道化師だったせむし男をめぐる一連の不思議な話をまとめたものです。死体をたらい回しにするという笑い話ですが、よくできた構成になっており、噺家の桂九雀師匠が『太兵衛餅』という新作落語に翻案しています。

このユダヤ人の医者（シリアのダマスカスで開業していました。ある時、総督と呼ばれて美しい若者を診察するのですが、その若者には右手首から先がありませんでした。いぶかる医者（若者は数奇な身の上話を語ります。若

者は美女殺しの下手人とまちがわれて、右手を切り落とされたのでした。

この若者はモスル（イラク北部）の生まれでしたが、叔父たちがカイロを褒め称える話を聞きながら育ちました。冒頭に挙げた一節が、叔父のカイロ話です。黄金期のバグダード同様、カイロには世界中の産物が運ばれ、多くの商人や学者の目的地となりました。

……「奥様、私は異国者ですので、隊商宿に泊まっています。あなたさまのよう（に）高貴なご婦人をお迎えする場所ではありません。そちらのお宅にわたしを呼んでいただけませんか？」するとその貴婦人はこう答えたのです。「よろしいわ。そういうことなら、金曜日の礼拝が終わったなら、いらしてくださいな。わたくしの家は『献身通り』にありますの。長官をしていたアブー・シャーマのお屋敷を探せばすぐわかりますわ」。（ガラン版 千一夜『キリスト教徒の商人の話』より）

この話も《せむし男の物語》に含まれています。話を語るキリスト教徒の

商人は、エジプト生まれのコプト教徒です。語り手の商人は、カイロで店を開いていました。ある日のこと、店番をしていると、たいそう美しい若者がやって来ました。若者が持っていた布には一つかみのゴマが入っています。若者はゴマの相場を訊ねると、「ナスル門の近くにあるジャワリーリ旅館まで来てください」と言い残しました。

ナスル門（勝利の門）は、現在もカイロに残っています。ファティマ朝期（909～1171年）に、カイロの北門として建設されました。ファラオ時代につかわれていた石材を流用したため、よく見るとヒエログリフの碑文なども見つかるそうです。若者が「旅館」と言っているのは、ハーンと呼ばれる隊商宿のことです。隊商宿は広い中庭を囲んだ四角形の構造になっていました。一階に荷物や商品を置き、商人は二階で寝泊まりするのです。このような隊商宿は、カイロをはじめとする大都市のほか、シルクロードのオアシス都市にもたくさん作られ、食堂、交易所、浴場などを備えた大規模なものもありました。

商売を通じて若者と親しくなったキリスト教徒の商人は、若者を食事に招きます。ところが客となった若者は、右手を袖に隠し、左手だけで食事をするのでした。不思議に思っ（て）わけを訊ねると、若者は何も言わずに袖の下から右手を出しました。驚いたことに、手首から先がすっぱり切り落とされて（いるのです。あまりのことに啞然とする商人の前に、若者は不思議な身の上話を語りはじめました。



スルタン・ハサン・モスク／カイロ・イスラーム地区

……わたしはバグダードで生まれましたが、旅の商人や諸国遍歴の人たちからエジプトの話聞き、カイロをめざすことにしました……カイロに着くとマスルール旅館で荷をほどき、バイナル・カスラインまで出かけました……

若者が投宿したマスルール旅館、つまりハーン・マスルールは、中世の記録によるとバイナル・カスラインの南端にあり、カイロでも一番繁盛している大きな隊商宿だったそうです。バイナル・カスラインは、ノーベル文学賞作家ナギーブ・マフフーズの小説でも有名です。「二つの宮殿の間」を意味してお

り、ファアティマ朝のころには王宮がありました。カイロ最大の商店街でもあり、料理を売る屋台なども並んでおいに繁盛していたという記録があります。バイナル・カスラインはムイッズ通りの名で現存しており、ユネスコの世界遺産に登録されているカイロのイスラーム歴史地区にあります。

さて、カイロに着いた若者がなじみの商人の店番をしていると、一人の女性客がやって来ました。ヴェールの端からのぞく黒い瞳に心を奪われた若者は、さまざまな心くばりを見せて彼女の家を招かれることになりました。

こうして若者はアブー・シャーマ邸

近くの彼女の家に入り、豪勢な御馳走につづいて夢のような一夜をすごすことができました。ところが逢瀬をくりかえすうちに路銀もすっかり底をつき、バイナル・カスラインを歩きながら兵士の財布に手をのびしてしまします。お縄になった若者は、ズワイラ（ズウェーラ）門の近くで右手を切り落とされてしまいました。

このズワイラ門も現存しています。ファアティマ朝時代に造られ、カイロの南を守っていました。門前の広場では公開の処刑がおこなわれており、生首が槍の穂先に突き刺さっていたそうです。カイロに入城したオスマン軍によつ

て、マムルーク朝最後のスルタンが処刑された（1517年）のもこの場所でした。

若者がふらふらになって恋人の家に転げこんだところ、彼女は若者が持ってきたお金には手をつけずに貯めていてくれたことがわかりました。二人は晴れて夫婦となり、平安に満ちた日々をすごすはずだったのですが、新妻はにわか病に斃れて世を去ってしまいます。彼女が亡くなった後、莫大な遺産のあることがわかり、若者はエジプトに残って商売を続けることにしたのでした。

ここで紹介した《せむしの物語》以外にも、アラビアンナイトにはカイロが舞台となる話がたくさん入っています。観光案内の副読本（？）として使ってみると旅の楽しみが増えるかもしれません。

P42~47

中近東・北アフリカへの旅行はP42~47をご覧ください。

西尾氏が副館長を務める

国立民族学博物館(みんぱく)

「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに、展示や情報発信を通じて、人間文化を探求への旅へご案内します。

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
TEL: 06-6876-2151



西アジア展示のなかの楽器コーナー

せむし男の物語の冒頭シーン（ロバート・スマーク画）



商いの中心地、ハーンハリリ市場/カイロ